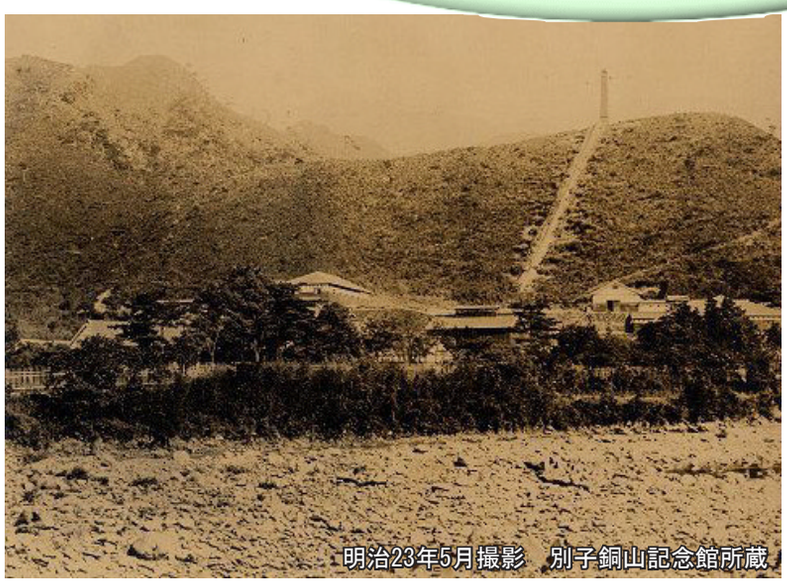
製錬　広瀬宰平

60まいん

やまねせいれんしょあと
山根製錬所跡

現在に残る郷土のシンボルタワー


明治23年5月撮影　別子銅山記念館所蔵

やまねせいれんしょ
山根製錬所

は、明治19年(1886)に着工、明治21年に完成しました。

別子山中での製錬事業を新居浜側へ移転するとともに、別子鉱石が低品位・多硫酸という性質から湿式製錬が適することから建設されました。

同年には惣開(そうびらき)製錬所(新居浜製錬所)も完成しています。

広瀬宰平は、山根製錬所の設計をドイツで学位を得た工学博士である東京大学教授の岩佐巌(いわさいわお)に依頼しました。

エントツ山の愛称で親しまれる生子山(しょうじやま)

山根製錬所では、銅を精錬するだけではなく、その過程で発生した亜硫酸ガスから硫酸を、残りカスから銑鉄(せんてつ)を製造するなどし、明治25年9月には宮内省へ「別子銅山産出品標本」として献納もされました。

さらに、明治26年2月、製鉄を実用化させるため、惣開の銅製錬所に新居浜製鉄所が併設されました。このことは、官営の八幡製鉄所に先立つこと7年も前のことでした。新居浜は日本における最も古い製鉄および化学工場の発祥地といえます。

宮内省に献納された産出品標本
「広瀬宰平小伝」
広瀬歴史記念館発行より引用

ところが、これらの製鉄・化学事業は当時の技術水準では海外に太刀打ちできず、赤字経営が続きました。

また、煙突から出る亜硫酸ガスが付近一帯の農作物に被害を与えるという深刻な煙害問題が発生しました。

さらに、明治27年４月に岩佐巌が退職、11月には広瀬宰平の引退も重なるのにともない、明治28年に山根製錬所と新居浜製鉄所は閉鎖されました。

事務所
明治23年5月撮影　別子銅山記念館所蔵

レンガ造りの煙突は、雨風にさらされながらも、120年の時を越え、別子銅山を象徴するモニュメントの一つとして、静かに新居浜の繁栄を見守っています。

山根製錬所跡の煙突

どれくらい？

この煙突の長さはどのくらいあるでしょう？

答えは、裏にあります。

http://nmh.hearts.ne.jp/k/gaidobook/060/index.htm